

ゲリラ豪雨

今年、新聞紙面やニュースでよく見聞きしたことばで「ゲリラ豪雨」「ゲリラ雨」を思い浮かべる人は多いだろう。

狭い地域で比較的短時間に大量の雨が降る現象で、どこでおこるかかわからないことから「ゲリラ豪雨」と言われる。「ゲリラ」とは、「敵の後方や敵中を奇襲して混乱させる小部隊。遊撃隊」（『大辞林』第3版・三省堂）のことをいうスペイン語語源の外来語である。スペイン語では、「小さな戦争」という意味がある。19世紀のナポレオンに対するスペイン人の反乱が始まりと言われ、大正時代には日本でも使われるようになっていたようだ。1960年代、ベトナム戦争の戦略として使われ、多くの日本人が意味を理解できている外来語と言えそうだ。

「ゲリラ豪雨」も「ゲリラ雨」も気象用語としての定義がない。状況や現象をわかりやすく伝えられることばとして新聞や放送が使い始めたようだ。いつごろから使われるようになったのかは明確ではない。用語班の資料では1985年の放送用語委員会で「ゲリラ雨」についての問い合わせがあったことが記録されている。また1986年の『NHK最新気象用語ハンドブック』（NHK出版）にも『「ゲリラ豪雨」はなるべく使わない』と書かれている。

似たことばに「集中豪雨」がある。「ゲリ

ラ豪雨」同様に雨量など気象用語としての定義はないが、「狭い範囲における豪雨。局地的な豪雨」として、気象情報で使うことがある。これももともとマスコミが使い始めたことばである。1953年、朝日新聞（大阪版）で使われたのが最初であると言われている。もともとは「大雨」で表現していたが、のちに「豪雨」と「集中豪雨」が加わった。これまでの常識では考えられない気象現象が起るようになり、より強いことばで表そうという意識が働くのか、どんどん強烈なイメージのことばを使う傾向にあるようだ。

放送では、「ゲリラ豪雨」ということばを、積極的に使うべきではないだろう。正確な情報が求められる気象情報でイメージだけをとらえたことばを使うことの危険性と違和感があるためだ。多くの人が危険にさらされる可能性がある雨の恐ろしさを知らせるためにあえて強いことばで注意喚起しているのだ、という主張もあるかもしれない。しかし、不安ばかりをあおり、正確な情報が二の次になってしまうということにもなりかねない。また、軍事的なことばを身近なところで使う違和感もある。「局地的な豪雨」などと言っておいて、くわしく説明をする必要があるだろう。気象用語はできるだけいねいに、またその場にあった的確な説明をすることが大切だ。

山下洋子（やました ようこ）